

池田SGI会長と文化の開花

ロケツシュ・チャンドラ

栗原淑江 訳

本日は、池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長、川田洋一博士、およびインド創価学会副議長であるアカーシ・オオウチ博士のご厚情により、このように東京を訪問することができ、私にとって最高に素晴らしい日となりました。

本年は、池田SGI会長が八十歳を迎えられた、特別な佳節の年であります。インドでは、人生において三つの重要な節目があるとされます。一つは、六十歳を迎える節目で、それは一回りの年月の満了を意味します。第二の大きな節目は、八十歳を迎える時です。

インドでは、八十年とは「一千回の満月」を迎える年とされます。生まれてから八十歳を迎えるまでに、満月が約千回、訪れるからです。八十歳を迎えられた池田会長は、「一千回の満月」を達成されたことになりました。心からお祝いを申し上げたいと思います。

中国でも、清朝において、八十歳は重要な儀式が行われる佳節でした。〔第六代皇帝〕乾隆帝は、六十歳に達した折に、次のように誓ったといわれています。「私は、八十歳になるまでに、仏教経典を満洲語に訳し終え、出版するだろう」と。実際には、経典の翻訳は七年間

で完了したのですが、その出版は、皇帝が八十歳になるまで、すなわち「一千回の満月」が訪れるまで、十三年間、待たなければなりませんでした。

千という数字は、力強い数を意味します。また、月はインドでは特別な意義をもちます。月は、「甘露(不死)の雨」を意味するのです。月が人間に「不死の雨」を降らせると同じように、人間は、力の限り社会に貢献することが期待されます。

「一千回の満月」という至高の規準にかなう人こそ、ほかならぬ池田大作会長であります。会長は、「価値」の創造に徹してこれ、それらの「価値」を階級や信条、国籍にかかわらず、世界中の人々に広めてこられました。会長は、歴史や社会的状況によって、または宗教的な概念によって定められるあらゆる区別を超越しておられます。会長は、人間こそが最高の存在であると考えます。会長は、最も賢明で卓越した人物なのであり、二十一世紀にあつて、人類に「甘露(不死)の雨」を降らせておられるのです。こうした類まれなる貢献は、「一千回の満月」にもまさる称号に値するものです。

今朝、私は、日本のファッション雑誌に目を通しました。そこには、ある女性デザイナーの記事が掲載されていました。彼女の商標は「ソマルタ(Somarta)」というものでした。彼女によれば、「Soma」はサンスクリット語の「月」で、「Amrita」は「甘露」を意味します。月が人類に「甘露(不死)の雨」を降らせるという考えを、このように日本で発見し、とてもうれしく思いました。この商標は、おそらく、経典に由来するでしょう。

私たちは皆、これからも池田SGI会長が、末永く、人類に「甘露(不死)の雨」を降らせてくださることを、心よりお祈り申し上げます。

「神中心」から「生命中心」へ パラダイム転換

さて、パリー經典の『ニカーヤ』あるいは中国の『阿含經』では、プラセーナジット王(波斯匿王)の物語が語られています。プラセーナジット王の国には、悪名高きアングリマラー(Angulimala)という獠猛な強盗が



博士は1927年生まれ。仏教をはじめ東洋思想研究の世界的権威であり、池田SGI会長と対談集『東洋の哲学を語る』を発刊している（3月19日、東京・戸田記念国際会館で）

住んでいました。「Anguli」とは「指」の意味で、「mala」とは髪飾りの意味です。アングリマラーは、千本の指で作った髪飾りを、自分の母親に贈るという誓いを立てていたのです。これは、古代におけるテロリズムの一例といえましょう。

ブラセーナジット王は、アングリマラーを捕らえようと、兵士の大隊を送りましたが、捕らえることはできませんでした。そこで、最終的には、王自身が、大隊とともに彼を捕らえに出向くことにしました。王が首都を出発しようとしたとき、釈尊が出家者たちとともに歩いてくるのが見えました。

釈尊は、ブラセーナジット王にいました。「新参のこの出家者に敬意をお払いください。私達は、彼をアヒムサカ（Ahimsaka＝非暴力を好む者）と呼んでいます。彼はもう暴力を振るわないでしょう」と。釈尊は王に、「このアヒムサカこそ、かつて恐れられていた強盗アングリマラーです」と説明したのです。

現代社会にも、多くのアングリマラーが存在します。彼らは、私たちから指を奪おうとするだけでなくて、

生命そのものを奪おうとするのです。そのような暴力が、世界中にはびこってしまっています。そうしたなかで、池田SGI会長が発表される「平和提言」や、平和への断固とした献身的な行動は、アングリマールと釈尊の物語を思い起こさせるものです。

ブラセーナジット王は、釈尊に、「あなたは誰にもできないやり方で、この恐れられた強盗を出家者にする事ができたのです」といいました。まさに釈尊の真価が発揮されたのです。

それと同様に、池田会長が『法華経』に説かれた思想を広めることによって獲得されたご功績は、いつの日か、平和の問題を人類の関心事の焦点とさせることでしょう。人類がおかれた状況の改善をめざす会長の偉大なる貢献は、百九十以上の国・地域に『法華経』の価値をもたらすと同時に、平和こそが人間生活にとって最重要の課題であるという理念をもたらしてこられたのです。

平和とは、戦争状態がないというだけではなく、心の中での平和も意味します。池田SGI会長は、はるか

昔に釈尊が行ったと同じ行動をされています。会長は、いわば、釈尊の精神を体現した菩薩であります。日本の国は、三つの經典が説く価値に基盤をおいてきました。『勝鬘経』^{しょうまん}、『金光明経』^{こんこうみょう}および『法華経』です。

池田SGI会長は、今ふたたび、『法華経』に説かれた「価値」に対する、日本人の関わりを新たにさせておられます。『法華経』は万人に開かれた經典です。開かれた經典というのは、ドグマがなく、戒律がないということです。私たちの啓発された良心こそ、私たちの戒律なのです。そして、私たちの良心は「価値」であります。これらの「価値」から、何をすべきか、何をすべきでないかが明確になります。

また、開かれた經典は、時間と空間を超えて、人間の「価値」を提示することができます。それらの「価値」は、変化し、発展し、あるいは衰退します。価値体系のなかにおいて、量的および質的な変動が生じるのです。『法華経』は、仏教經典のなかでも、最も深遠な經典の一つです。幸いなことに、池田SGI会長は、生命を賭して、献身的にこの經典の思想を広めておられ

ます。会長は、日蓮大聖人の不滅のメッセージを新たなものとして提示されています。日蓮大聖人は、七百年前に、日本（日）と蓮華（蓮）、すなわち日本と「価値」は一体であると語りました。

テロや原理主義、暴力の圧倒的な力が蔓延する世界にあつて、「価値」が伝播されなければなりません。日本はG8〔The Group of Eight 先進国首脳会議に出席する八カ国。日・米・英・仏・独・伊・加・露〕のメンバーであり、西側の世界で尊敬を集めています。また、日本は、その経済力や秘めた力によって、世界中に平和のメッセージを広めることができる、きわめてまれなアジアの国でもあります。

池田SGI会長は、いくつかのシステムを調和させるという問題について考察してこられました。世界の政治の舞台では、「国益」がものごとを支配しているために、不安定な状態が存在します。もちろん、ナショナリズムはつねに存在するでしょう。ある種の暴力も、つねに存在するでしょう。しかし、暴力は制限されなければなりません。その限界を決定することが不可欠

なのです。

では、その限界の決定に貢献するのは、何なのでしょう。生命全般、および人間存在が、その核心でなければなりません。生命および人間の発展が核心であることが、ひとたび受け入れられるならば、戦争の回避が考慮されなければなりません。最も高い「価値」をもつものは生命です。生命は、私たちの存在の基盤なのです。

池田SGI会長は、『二十一世紀への対話』（アーノルド・トインビー博士との対談集）において、はじめて、生命の優越性について広範囲にかつ明確に、指摘されました。アカデミックな用語でいえば、会長の見解は生命中心のビジョンであり、神中心のドグマは避けられています。

生命中心のパラダイムにおいては、人間は暴力の方向には向かいません。というのも、人間に暴力を用いるよう要求する神が存在しないからです。アメリカのブッシュ大統領は、神が彼にイラクに侵攻するよう要求したと語りました。しかし、生命中心主義にあつては、

神はそんなことを要求しません。そうではなくて、何をなすべきか、何をなすべきではないかを私たちに告げるのは、良心なのです。

私たちの良心は、生命の概念によって条件づけられます。私たちには、命を奪う権利があるでしょうか。私たちは、食物にするために動物を殺してもいいのでしょうか。もちろん、实际的に中庸的な、バランス感覚のある限度は存在します。生命におけるすべては、相対的なものであり、絶対的ではありません。一方、神中心のシステムは、私たちを絶対不変のものに無理に従わせます。人間中心のパラダイムにおいては、人間が最重要です。人間こそ、行為の第一の関心事なのです。

そのような人間中心的な視点からすると、自然は重要な役割を演じています。ヨーロッパの思想家たちは、生態系を傷つけたり、自然を破壊したり、激しく汚染することに専念していますが、それは、人間のニーズに対するバランスを欠いています。人間にはニーズがあり、若干の汚染もやむをえないかもしれません。し

かし、それは節度をもった、中庸的なものでなければならぬのです。

自然のもつ固有の可能性と人間のニーズとの調和を、最高の智慧によって考慮しなければなりません。人間中心のパラダイムにおいて、人間は自然とともに生きなければなりません。一方、神中心のパラダイムにおいては、神による計画は絶対的なものです。その計画は神聖なもので、それに異議を申し立てることはできません。

それに対して、人間中心のパラダイムでは、生命が最高の価値をもち、その他のものはすべて相対的なものと考えられるのです。すべては、時間と空間によって条件づけられます。たとえば日本では、人々は肉を食べますが、インドでは、人口の半分は、肉を食べません。人間が海を汚染したり、巨大なライフサイクルを破壊する権利がないのはたしかです。人間が手当たりしだいに生物を殺すならば、ライフサイクルは侵害され、惨憺たる結果をもたらしてしまうでしょう。

西欧では、自然の神聖さという考え方が欠けていま

す。ヨーロッパの人々がキリスト教を受容したとき、最初に行ったのが木を切り倒すことでした。それまで、木は神聖なものと考えられていたため、異教的であると思われたからです。泉も、神聖なものと考えられていたために、破壊されました。

人間中心のパラダイムにおいては、生命に関わるものすべては神聖とされます。神聖さ、あるいは清浄さは、神のような外部の代表者の既得物ではなく、この地球上における、まさしくこの生命そのものにあるのです。漢字の「天」において、一番上の線は価値のシステムであり、下の第二線は自然を表します。そして、この二つが機能し、両者を結ぶ空間にあるのが「人」なのです。漢字の「天」は、この三つの筆遣いにおいて、三つの重要な概念を秘めています。すなわち、生命、自然、そして「価値」の概念です。これら三つは調和のうちに機能しますが、ダイナミックなバランスを創造するためには、調和が重要なのです。

池田SGI会長の対談集『二十一世紀への対話』では、これら三つの要素が生命を豊かにし、平和を実現する

ために果たす役割が、雄弁に証明されています。私たちが生命について考えるときには、平和について考える必要はありません。平和は戦争がない状態であるだけでなく、あらゆる苦悩の終焉^{しうえん}でなくてはなりません。

一部の人々は非常に多くの食物をもち、それらをむだにしていますが、その一方で、世界中に空腹な人々が存在するのです。半分の人口が食物を得ることができない国もあります。私たちは、すべての局面において、人間の生命について考慮しなければなりません。そうするとき、平和が実現するでしょう。それは、戦争の最前線における平和のみならず、世界中の幾百万もの人々の生活における平和なのです。

価値創造に献身する「責務」が

グローバル化、とくに経済的な面でのグローバル化は、「価値」の方向へ転換しなければなりません。「生命の価値」は、世界中で共有されなければなりません。私たちが自由にできる資源は、限られています。

それらは、近い将来、枯渇してしまうかもしれないのです。

そうしたなかで、人類は何かができるのでしょうか。池田大作SGI会長は、生命を最優先し、平和を促進するよう要請されていますが、それは、内外ともの平和への要請なのです。その要請は、私たちが「価値」に対する義務をもっていることを、思い起こさせるものです。「創価」は、価値の創造を意味します。それは、非常に重要な理想です。

第一次世界大戦（一九一四年―一八年）の後、ドイツの危機の時代にあつて、オズワルト・シュペンギーラーの有名な書『西洋の没落』が著されました。西洋は「没落」したというだけでなく、「価値」について考察しなければならぬとする人々もいました。「価値」は、ドイツの哲学において重要な位置を占めるようになりました。第二次世界大戦後、ドイツがよりいっそう経済を指向するようになったとき、「価値」が占めていた中心的位置は後退しました。

日本においては、創価学会の三代の会長が、「価値」

の概念に深く関わってきました。実際、「価値」は、哲学における最も基本的な理念の一つです。哲学は、純粹理性に関係するだけでなく、生命に関係しなければなりません。三代の創価学会会長は、「創価」という言葉をとくに強調しましたが、その「価値」は、人間の主要な関心事です。これらの「価値」は、すべてのレベルにおいて作用しなければなりません。

仏教で説く「八正道」は、神については語らず、天国についても語りません。「八正道」は、人生における八つの重要な点について説いています。私たちが、それらを遵守するならば、恐れたり、悲しんだりすることはありません。もし、それらの原則に違反するならば、「苦しみ (dukkha)」という悲惨な状況におちいるでしょう。釈尊は、「苦しみ」について語る際、同時に、そうした否定的なものを避ける方法も定めています。

『SGIグラフ』に掲載されている池田SGI会長の詩は、激闘へのインスピレーションを与えてくれます。会長の詩は、「価値」のために働くという献身を要請するのです。私たちは、象徴的な宇宙という世界となら



講演会とともに「人類の遺産・仏教経典——池田SGI会長とロケッシュ・チャンドラ博士との交流」展（当研究所主催）を開催、博士から寄贈された各種大蔵經の写本資料その他、貴重な品々を公開し、11日間で約6千人が訪れた

んで、日常のありふれた生活世界をもっています。詩人は、その両方の世界を呼び起こします。

詩人であられる池田会長は、私たちを高貴な象徴的な宇宙へと呼び出します。偉大な作家、デザイナー、芸術家、茶道の師匠たちは、非功利主義的な象徴的世界において活動しますが、それは「空（sunyata）」の領域です。この世界から、多くのものが湧き出します。

この世界には、個人的利害も集団的利害も存在しません。責任と義務は存在します。それから、私たちが高貴であると思うすべてに捧げる「八正道」が生じます。高貴さは、私たちの中に存在するのです。私は、池田会長の詩に感銘を受けました。そこでは、会長は、人間と人間、人間と自然、人間と宇宙の連関について語っています。

詩には、このようにあります。「本来——人間と人間も 人間と自然も 人間と宇宙も いっさいは結びつき 天女のサリーのごとく 絢爛たる芸術を織りなしている……」

サリーは、インドの衣装です。池田SGI会長は、

敦煌の壁画に描かれた天女（飛天）の衣装のひだを、生命の美に結びつけておられます。会長のような感受性をそなえた詩人のみが、見えざる生命の糸を見ることができなのです。

会長は、私たちに、「縁起」の様相を見える形で思い浮かべさせてくれます。そこでは、宇宙の森羅万象が共存しています。人間による科学技術的行動によって、



展示を見学する博士（「チベット大蔵經の木版印刷過程」「經典の形態の移り変わり」の説明パネルの前で）

自然がますます脅かされている時代にあって、縁起のような相互依存関係における共存と共同創造についての理念が、人間の思想の基盤とならなければなりません。

池田SGI会長は、重要な価値を指し示し、それらの価値が国家政策の一部を構成することができるように具体化しました。あらゆる個人の中心的役割または任務は、内なる変革の実践を通して、人間の幸福を促進することにあります。

近代の諸憲法は、権利を強調していますが、義務は強調しません。人々は権利をもちます。しかし、人々の義務のほうはいかなるものでしょうか。義務は強調されません。私たちに何かを得る権利があるならば、そのお返しに何かを与える義務もなければなりません。権利と義務は相補的でなければなりません。義務を強調することは重要です。私たちは、起こるものすべてに対して、責任があるからです。

池田SGI会長は、『二十一世紀への対話』において、「国民総福祉（GNW グロス・ナショナル・ウェルフェア）」

について語られています。今日、あらゆる国家は「国民総生産（GNP　グロス・ナショナル・プロダクト）」に関心をもっています。しかし、国民総生産が上がると、価格が上がり、生活はいつそう困難になります。国民総生産は、生活の質を減じてしまうのです。

それに対し、「グロス・ナショナル・ウェルフェア」も考慮しなければなりません。ブータンの国王は、それを「国民総幸福」と呼んでいます。幸いなことに、中国政府は、統計上、「幸福度指数（Happiness Index）」を準備し始めました。いかなる議会制民主主義においても、権利があるのに義務がなければ、権利は最高の形で機能することはできません。

国民総生産は、幾つかの家々には入り込んでいますが、他の家々は暗闇の中に留まっています。それに對し、池田SGI会長が示される「グロス・ナショナル・ウェルフェア」は、低い階層の人々や忘れられた人々にいたるまで、すべての家を照らすことができるのです。

池田SGI会長は、一神教と汎神論の、基本的な相

違について指摘されています。今日、世界のいたるところに見られるテロリズムの多くは、一神教が生み出したものといえます。人々は、テロリズムの背後には、特定の関心事があると考えます。人々がテロリズムに走るのは、彼らがそれを神に与えられた義務であると感じているからです。

一方、汎神論においては、神は至上命令を与えるものでありません。そこでは、人間の精神が神聖なものへと高まり、その神聖なものの中にメッセージを発見するのです。メッセージは人間の内部から出てくるもので、到達できない天国や、解釈を受け付けない聖典から出てくるものではありません。

絶対的なものを信じる体系も、いくつか存在します。絶対的なものは、ドグマを持ち込み、ドグマは暴力につながります。そして、暴力は最終的にテロリズムを持ち込むのです。日本には、幸運にもテロリズムが存在しません。

テロリズムを受けやすい国々は、その危険性を承知していますが、テロリズムがどこで起こるか、なぜ起

こるかについては、誰も考慮しません。聖書そのものに、生まれながらの罪、すなわち原罪が説かれています。私たちは、罪人として生まれるとされます。私たちは、生まれるというまさしくその事実によって、罪を受け継ぎます。そのように、私たちは肯定的に考えることができず、神から強制的に与えられたドグマに従うことが、神聖な義務とされるのです。

池田SGI会長の美しい詩は、うたっています。

「地球は 多様性から成る 百花繚乱の美しき星だ」

多様性についての会長の理念は、理念の多様性や仏教における概念の多様性に結びつきます。ひとたび、私たちが多様性を受け入れるならば、紛争は減少するか、消滅するのでしょうか。神の多様性という考えは、生物の多様性から、当然のように推論されるものです。

『法華経』の各品は、二つの部分に分かれています。最初の部分は「散文」で、それに詩的な「偈^げ」が続きます。散文と詩句による言説により、『法華経』の理念は、私たちの頭に訴えるだけでなく、心にも訴えます。私たちは単にそれを理解しなければならいだけでなく、

心で強く受け止め、それを桜が咲くように、私たちの心の中で開花させなくてはならないのです。

日本の桜は、森羅万象すべてが一時的なものであり、過ぎ去るものであることを、人々に教えます。桜は、私たちが、つねに滅び、つねに新たにされるシステムの一部であるという感覚を与えます。私たちは、破壊のプロセスに落胆する必要はありません。しかし、建設のプロセスのために努力しなければならないのです。

池田会長の詩を引用しましょう。

「私たちの言葉で 我らの行動で 砂漠と化した 人間の心の大地を耕すのだ」

「私たちは『人間』なのだ！ 我らには 詩心が脈打っているのだ！」

日本において、詩は重要な位置を占めてきました。戦場で戦った偉大な闘將たちは、川のそばに座り、桜の花に寄せる詩を書いて、それを桜の木に掛けたといえます。何と美しい趣向でしょう。戦場におもむいた彼らが、生命自体の美しさを賞賛したのです。人間の

生命だけでなく、動物や植物の生命も。一本の松は、私たち人間の兄弟として存在します。生命の全体——人間、動物、植物——を受け入れます。

そうした存在をめぐる詩は、池田SGI会長の理念と実践において至高のものとなります。会長の理念は、会長の行動です。経典において、釈尊は「絶えず動く」人物として語られています。釈尊は、つねに動いています。すべての生きとし生けるものが行動を必要とするように、釈尊もつねに行動しています。同様に、池田SGI会長の行動は、私たちに新たなビジョンを与えるために、私たちを照らし続けてくれます。最も深いレベルのビジョン、詩のレベルでのビジョン、そして平和と生命の理念を定めるための基本的なカルマ（行為）を理解させるビジョンを。

人生は、「価値」の壮麗さのなかで、そして「創価（価値創造）」の優美さのなかで、すごされなければなりません。今日、私たちは、八十歳、すなわち「一千回の満月」を迎えられた池田SGI会長に、千年以上にわたって人間精神を千倍にも開花させゆくであろうとの

献辞をささげます。千とは力を意味します。すべては、献身的に、全力で、そして美しさをもって、力強くなされなければなりません。それが、私たちが世界中の人々に心から捧げるところの義務なのです。

【質疑応答より】

◆『法華経』のなかに慰めと激励を見出すこと——若い息子を亡くした母からの質問に対して

仏教の認識によると、生命は一時的なものであり、過ぎ去らなければならないものです。あなたのご息子が生前に何をなしたにせよ、よい行為にせよ、悪い行為にせよ、彼はそれらの結果を受け取ることでしょう。よい行為の割合が高ければ、将来、彼は偉大な運命を与えられるが、悪い行為の場合も、それに応じた運命を与えられます。

あなたは、ご息がすぐに再び生まれてきていることを希望しながら、生きてください。あなたが『法華経』への信仰を強くたもっているため、ご息は、亡くな

られたときの状態よりも、よりよい楽しい人生をもつことになるでしょう。私たちは、絶望のうちにではなく、希望のうちに生きるべきなのです。

私たちの希望は、前向きな、肯定的なものです。しかし、すべてはご子息自身のカルマに依ります。あなたのカルマは、非常によいものです。というのも、創価学会に入会し、池田会長の教えを受け、日蓮大聖人の教えを受けることができたからです。あなたは、慰めと激励を見出すことのできる『法華経』と出会えた幸運に感謝しなければなりません。

『法華経』には、前向きな、肯定的なアプローチが説かれています。日本の人々は、その前向きな見方と勤勉さで知られています。日本人は、六世紀に仏教を受用し、五十年ほどで、素晴らしい法隆寺を建設しました。日本人には、ものを創造する上での強い意志がそなわっています。明治維新から五十年後、日本は日露戦争で、ヨーロッパの列強を破りました。近代アジアの民族が、現代ヨーロッパの大国を破ったのはそれが初めてのことでした。

あなたは、あなたの国の歴史において、そして、あなたの個人的な生活においても、偉大なる伝統を受け継いでいらっしゃいます。あなたが創価学会を知ることができ、池田SGI会長の偉大なる心に接することができたことは、非常に幸運な出来事であることに、気づかなければなりません。

創価学会は、『法華経』を現代のことばで考え、価値と経験の観点から解釈している、大きな仏教団体の一つです。あなたが、今ここにいらして、『法華経』のなかに慰めと激励を見つけられたことを、私はとてもうれしく思います。

◆『法華経』と価値——反価値的な生き方をしている人についてどう考えるか、という問いに対して

まずはじめに、私たちは、何が価値的で、何が反価値的であるかについて、人々に説明しなければなりません。反価値的なことの多くは、無知に由来します。思考してはじめて、私たちには自らの行動について別の見方ができるようになるのです。

『法華經』が提起している価値は、まさしく人生に関連するものです。この人生を、経済的、社会的、文化的など、あらゆる意味において、すばらしく、楽しく、意味のあるものとしてください。私たちが考える何かをもっているとき、反価値的なものは減少し、消滅します。

あらゆる人間には心があります。残酷な人間すら、いくばくかの慈悲心をそなえているのです。私たちは、その慈悲心に火をつける必要があります。そして、私たちが彼らを理性の道（正道）に連れ戻すとき、私たちは自分自身の慈悲心についても考えるようになるでしょう。

私たちは旅人です。私たちは、広大な道を横切って進みます。ひとたび、善と悪を認識し、理解するならば、新たなビジョンが開けます。それは、まさに、創価学会が池田SGI会長のリーダーシップのもとで行っていることなのです。価値の体系に関する書物が出版され、そのメッセージは百九十二カ国・地域にまで広まりました。

今後、四、五十年のうちに、しだいに新たな世界の思潮が出現するでしょう。それは、人類が価値について考察する、新たな概念の世界となるでしょう。価値の領域に続く道が、開かれなければなりません。「開かれていること」は、成功を収めるために必要なことです。人々は、強制されれば反発するでしょう。しかし、開かれていれば、人々は次のように感じるでしょう。「さあ、それを試そうではありませんか」と。

◆池田SGI会長によるガンジー主義の解釈について

マハトマ・ガンジーが展開した運動は、本質的に、民衆を志向したものでした。現在にいたるまで、ガンジーは、インドの指導者や民衆を鼓舞しています。彼は生き続けていますが、あまり表立たない状態で生き続けています。目立つ形での運動は多くはありませんが、ガンジーの精神はインド国民の心の中に深くしみこんでいるのです。

インドの国会議事堂の入口には、あたかもインドの小さな「大仏」のように、ガンジーの大きな像がすえ

られています。国会議員やインドを統治する人々は、その像を見て、ガンジー主義の価値観が尊重され、認められ、行動に移されなければならないことを、たえず思い起こすのです。このように、マハトマ・ガンジーの精神は、インドでは明確に継承されています。

それを、普遍的な精神としてこられたのが、池田SGI会長です。マーティン・ルーサー・キングと同様に、ガンジーは国際的な役割を演じるようになりました。ガンジーのメッセージは、生前に彼が発したものをはるかに超えています。池田SGI会長は、ガンジーの行動を完成させ、ガンジー主義運動を進めてこられました。ガンジーが抱いた理想を、世界百九十九カ国・地域以上に発信してこられたのです。それらの理想は、生き生きと躍動し、機能しています。

西欧諸国も、ガンジーのメッセージについて考察しています。それは、希望のメッセージです。二、三日前、私は、マールブルク大学から来たドイツ人の学者に会いました。彼女は仏教の研究者です。彼女は語っていました。

「私たちがインドを理解するには、過去の伝統だけでなく、現在の状況も考えなくてはなりません。世界に汚染が蔓延し、テロリズムが横行している現在、私たちはインドがもつ価値のメッセージを理解しなければなりません。ヨーロッパでは、テロリズムが諸国に侵入しているのが感じられます。また、自然は、回復したいほどに汚染されています。キリスト教から『ネオ・ペイガニズム（新異教主義）』に改宗する人々もいます。彼らは、幸福と自然が分離できないものであると感じています。『ネオ・ペイガニズム』は当然、本質的に、自然と人間生命の関係を安定させるものなのです」と。

ガンジーの世界は、人々が価値のために行動しているところで、影響力をもっています。マハトマ・ガンジーの最も偉大な現存の弟子は、池田SGI会長です。会長は、ガンジーの最もダイナミックな後継者であり、ガンジーのメッセージを世界中に伝えておられます。

池田SGI会長には、白人、黒人、他の有色人種など、世界中に多くの弟子がいます。ガンジーのメッセージ

は、現在、池田SGI会長の中に生きているのです。

会長は、ガンジールの業績にまさに真剣に取り組んでこられました。そのことは、人類の未来に、大きな花となって咲き誇ることでしょう。インドで発祥した仏教が、このように日本で花開いたことを、日本の人々は誇りとしなければなりません。ガンジール主義もインドで起こりましたが、今や、日本によって、人類全体へともたらされつつあるのです。

日本は、その特徴的な勤勉性をもって、人類の歩みを進めています。インドでは、僧侶は、「ビクシュ」あるいは「物乞いをする人」と呼ばれています。日本と中国では、僧侶は「沙門」あるいは「一生懸命に働く人」と呼ばれています。日本人々は困難な仕事に献身する、仏教の「沙門」といえます。現在、日本では、ガンジール主義のための懸命な活動が展開されています。ガンジール主義は、今や、「イケダ主義」となっているのです。

◆『法華経』写本をめぐる

クマールラジーバ（鳩摩羅什）は、『法華経』の二つのバージョン（系列）について語っています。今日、『法華経』には三つのバージョンが存在します。最も古いものは、中央アジアのホータンで見つかったサンスクリット語のバージョンです。それは、クマールラジーバが用いたバージョンに近いものと考えられます。第二は、ギルギット地域で見つかったバージョンで、第三はネパールのバージョンです。これら三つのバージョンには、異なる解釈があります。

創価学会は、クマールラジーバによって翻訳された『法華経』を公認していますが、これはオリジナルに最も近いものです。ギルギット本とネパール本は、それよりも装飾的な表現になっています。クマールラジーバが用いたサンスクリット語のテキストは、現存していません。ホータン出土のペトロフスキー本が、クマールラジーバのバージョンに最も近いものです。『法華経』研究者であるハインツ・ベツヒェルト教授は、クマールラジーバ訳がホータン写本と近接していると感じていま

す。ペトロフスキー本（ロシアのカシユガル駐在総領事であったペトロフスキーが集めた写本）の大部分はサンクトペテルブルク（ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所）に所蔵されています。そのなかの何冊かの二つ折り判の本が、大英博物館、マンハイム博物館などに所蔵されています。東洋哲学研究所および創価学会は、各国の法華經写本の（ローマ字版・写真版の）出版を進めています。

フルシチョフ（当時のソ連共産党第一書記）とブルガーニン（当時のソ連首相）が、当時のインド首相であったジャワハルラル・ネルーに、ペトロフスキー本のマイクロフィルムを贈ったことがあります。ネルー首相は、それを研究するようと、私の父（ラグヴィーラ博士。サンスクリットの世界権威。「インド文化国際アカデミー」の設立者）に与えました。そして、父は私にそれを与えてくれたのです。

私は、その白黒写真版をかつて出版しました。その当時、一、二センチメートルの小さな断片を特定することは難しかったのですが、今は、コンピュータによ

って、そのような小さい断片を特定し、カラー写真にすることも可能になっています。

漢訳本、すなわち中国での翻訳は、いわば創造的な翻訳といえます。逐語的な翻訳ではありません。クマラージーバは、仏教思想に熟達していました。彼は、中国語と同様に、サンスクリット語に堪能でした。彼は、中国の伝統における初の偉大な翻訳者です。

クマラージーバは、すべての語を翻訳したわけではありません。サンスクリット語は、洗練された言語です。言語学を勉強された方は、サンスクリット語が接頭辞と接尾辞をもっていることをご存知でしょう。一方、中国語の実詞（名詞・動詞など単独で意味をなす語）には、接尾辞や語形変化がありません。たとえば、法隆寺は、「Monastery of Flowering Dharma（栄える法の寺院）」と英訳されますが、それは、「Monastery for the Spread of Dharma（法の弘布のための寺院）」と訳されなければなりません。法隆寺が建立されたとき、法はまだ栄えていなかったからです。法は、将来、栄えるべきものでした。中国語は時制ももっていないので

す。

クマール・ジーバ訳の日中版と、ベトロフスキー本のサンスクリット語テキストとを、調和的に解釈することが要請されています。聖典においては、解釈学が生命と深遠さを与えます。仏教の伝統は、すべてが厳しく定められているキリスト教とは異なります。『法華経』は開かれた世界です。大空のように自由であり、大空に舞いゆく桜のように自由なのです。

◆インドの独立運動に対する日本の影響

インドの独立運動は、国際秩序の一環として考えられました。帝国主義が存在したところではどこでも、インドの独立運動が引き合いに出されました。ヒューマニティーは共有されなければなりません。共有しなければ、私たちは繁栄することはできません。

仏教の僧侶たちは、マハトマ・ガンジーのアーシラム（道場）で、「南無妙法蓮華経」を唱えました。マハトマ・ガンジーが、祈りの書に、この題目を採用したので。このマントラ（真言）は、インドのすべての

指導者たちに知られていました。というのも、彼らはよく、インドの解放運動の父であるマハトマ・ガンジーのもとを訪れたからです。

さらに、マハトマ・ガンジーは、日本製の三匹の猿の置物を持っていました。それは、「見ざる」、「聞かざる」、「言わざる」を表すもので、彼の机の上に置いてありました。聖者ガンジーのアーシラムは、日本によって高い威光をもったのです。

ネルーは国際主義者であり、このマントラの意味を知りたがりました。ガンジーは、私の父であるラグヴェイラ教授に、『法華経』の意味について尋ねたことがありました。父は、ガンジーに、「南條・ケルン本」〔各地に所蔵されていた写本を、仏教学者の南條文雄と日・ケルンが編集して、一九〇八年から出版したもの〕のサンスクリット語の『法華経』と、ケルンによる英訳を贈りました。

また、フルシチョフとブルガーニンがインドを訪問した際、『法華経』を持ってきて、ネルーはそれを私の父に与えました。ネルーは、『法華経』が自分のもとに

何度も到来するのを不思議に思いました。最初はマハトマ・ガンジーのアーシラムで、そして、今は首相公邸で。それは、インドにおける『法華経』の奇妙な旅でした。

現在、多くのインドの人々が『法華経』を実践しています。『法華経』は、インドの独立闘争の一部であり、独立したアジアの民衆を代表する日本に、私たちの注意をひきつけました。詩人タゴールが岡倉天心と対話をした後、ベンガルの絵画学校では、日本製の筆を用いるようになりました。

また、日本は、インドの政治生活において、特別な場所を占めました。日本に避難所を求めたインドの革命家たちもいました。また、当時、日本から安価なものが輸入されていました。自転車も二、三ルピーで購入することができたので、誰もが手に入れることができました。

私たちは、生活のすべてを快適にすることのできる日本人は偉大だと思ったものです。インドにおける日本の存在感は、文化や経済において明らかでした。「リ

キシヤ（人力車）」という日本語も知られています。

蓮華の美しさと、その蓮華が汚れた泥水の池から咲き出することは、衝撃的な対照でした。それは、現世における苦悩と、蓮華の清浄さへの変換を象徴するものです。心は、人間の身体における蓮華です。蓮華の花びらをちぎれば開花させられないのと同様に、『法華経』を唱えて美德を育てることによってのみ、人間は心を開花させることができます。

村の池の泥の中から咲き出でる蓮華の美しさは、生死の束縛から解放されゆく人間生命の高貴さの象徴なのです。

（ロケッシュ・チャンドラ／

インド文化国際アカデミー理事長）

（訳・くりはら としえ／東洋哲学研究所主任研究員）

（本稿は2008年3月19日、東京で行われた当研究所主催の特別公開講演会の内容をまとめたものです）